

作業部会における検証状況について

-検証事項に関するデータ・論点-

「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（中教審答申：平成26年12月22日）」において指摘された事項を踏まえて整理

- 1 日本人の英語力の現状を踏まえたテスト開発の在り方
- 2 受験料負担など経済格差や受験機会の地域格差による機会の不均等の解消
- 3 各試験間の得点換算・対照表の作成及び活用等の検証の在り方

※ 高大接続改革に関する参考資料

日本人の英語力の現状を踏まえたテスト開発の在り方について

〈現状〉

- 生徒の英語力について、目標としている卒業時の英語力を達成している生徒は、公立高校3年生で約31%、公立中学3年生で約32%
- ※ 中学校卒業段階：初歩的な英語を聞いたり読んだりして話し手や書き手の意向などを理解したり、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話したり書いたりすることができる。（英検であれば3級程度以上：CEFR A1レベル）
- ※ 高等学校卒業段階：英語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることができる。（英検であれば準2級～2級程度以上：CEFR A2～B1レベル）
- 高3生の英語力は、平成26年度高3生の英語力調査によると、
 - ・「読むこと」「聞くこと」は、A1上位からA2下位レベルに集中。
 - ・「書くこと」の得点者は全体の約70%（無回答：29.2%）、「話すこと」の得点者は全体の約85%（無回答：13.3%）となっており、課題が大きい。
 このような状況に対して、民間の英語の4技能を測定する資格・検定試験は少ない。

〈作業部会における論点〉

- これまでの作業部会における以下の意見等を踏まえ、新テストにおける英語の在り方についてどのように考えるか。
- 民間の資格・検定試験を活用すべきではないか。
- 新テストで英語4技能測定を行うことを前提とした方策を検討すべきではないか。
- 学習指導要領や日本人の英語力の現状を踏まえて民間の資格・検定試験団体等のノウハウを活かして国と協働で実施する方策を検討できないか。

平成25年度高校3年生の英語力について（アンケート調査より）

英検準2～2級程度（CEFR：A2～B1レベル）の生徒が約3割

英検準2級～2級程度以上（CEFR：A2～B1レベル）の公立高校3年の生徒数について教育委員会を通じてアンケートを実施

23年度	24年度	25年度	26年度
30%	31%	31%	調査中

【高等学校及び中等教育学校（後期課程）】

	高等学校第3学年に所属している生徒数…(a)	(a)の内、英検を受験したことがある生徒数…(b)	(b)の内、英検準2級以上を取得している生徒数…(c)	(a)の内、英検準2級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数〔(c)以外〕…(d)	(c)と(d)の計
普通科等	699,313 人 (728,795人)	228,184 人 (248,663人)	72,922 人 (73,243人)	139,155 人 (148,579人)	212,077 人 (221,822人)
	((a)に占める割合)→	32.6% (34.1%)	10.4% (10.0%)	19.9% (20.4%)	30.3% (30.4%)
英語教育を主とする学科	7,699 人 (8,056人)	6,493 人 (6,282人)	5,021 人 (4,733人)	2,099 人 (1,872人)	7,120 人 (6,605人)
	((a)に占める割合)→	84.3% (78.0%)	65.2% (58.8%)	27.3% (23.2%)	92.5% (82.0%)
合計	707,012 人 (736,851人)	234,677 人 (254,945人)	77,943 人 (77,976人)	141,254 人 (150,451人)	219,197 人 (228,427人)
	((a)に占める割合)→	33.2% (34.6%)	11.0% (10.6%)	20.0% (20.4%)	31.0% (31.0%)

注)「英検準2級以上相当の英語力を有すると思われる生徒数」とは、英検準2級以上は取得していないが、相当の英語力を有していると英語担当教員が判断する生徒の人数を指す。
出典：「英語教育実施状況調査」(H25年)

◆ 第2期教育振興基本計画（平成25年6月14日閣議決定）（抜粋）

成果目標5（社会全体の変化や新たな価値を主導・創造する人材等の養成）

「社会を生き抜く力」に加えて、卓越した能力※を備え、社会全体の変化や新たな価値を主導・創造するような人材、社会の各分野を牽引するリーダー、グローバル社会にあって様々な人々と協働できる人材、とりわけ国際交渉など国際舞台で先導的に活躍できる人材を養成する。

これに向けて、実践的な英語力をはじめとする語学力の向上、海外留学者数の飛躍的な増加、世界水準の教育研究拠点の倍増などを目指す。

※能力の例：国際交渉できる豊かな語学力・コミュニケーション能力や主体性、チャレンジ精神、異文化理解、日本人としてのアイデンティティ、創造性など

【成果指標】

＜グローバル人材関係＞

①国際共通語としての英語力の向上

・学習指導要領に基づき達成される英語力の目標（中学校卒業段階：英検3級程度以上、高等学校卒業段階：英検準2級程度～2級程度以上）を達成した中高校生の割合50%

②英語教員に求められる英語力の目標（英検準1級、TOEFL iBT80点、TOEIC730点程度以上）を達成した英語教員の割合（中学校：50%、高等学校：75%）

◆ 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告

（H26年9月26日 英語教育の在り方に関する有識者会議）（抜粋）

生徒の英語力の目標については、「第2期教育振興基本計画」（平成25年6月14日閣議決定）において、中学校卒業段階で英検3級程度以上、高等学校卒業段階で英検準2級程度～2級程度以上を達成した中高生の割合を50%とすることとされている。この実現に向けて取り組むとともに、高等学校卒業時に、生涯にわたり「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を積極的に使えるようになる英語力を身に付けることを目指す。

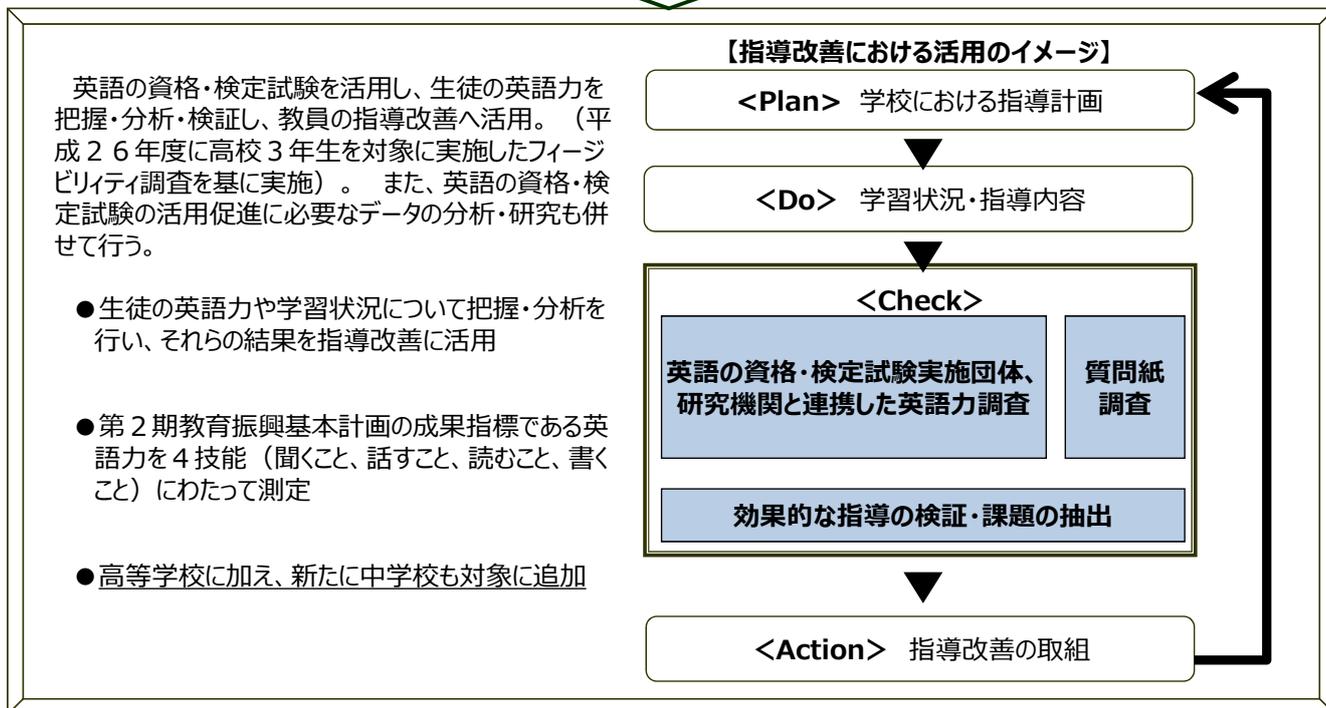
あわせて、生徒の英語力の目標を設定し、調査による把握・分析を行い、きめ細かな指導改善・充実、生徒の学習意欲の向上につなげる。これまでに設定されている英語力の目標だけでなく、高校生の特性・進路等に応じて、高等学校卒業段階で、例えば英検2級から準1級、TOEFL iBT60点前後以上等を設定し、生徒の多様な英語力の把握・分析・改善を行うことが必要。

外部試験団体と連携した英語力調査事業

平成27年度予算額(案) 116,325千円(116,325千円)

英語教育の在り方に関する有識者会議報告(H26.9.26)

生徒の英語力を把握し、きめの細かな指導の改善・充実や生徒の学習意欲の向上につなげるため、「第2期教育振興基本計画」(平成25年6月14日閣議決定)において掲げられている英語力の目標(学習指導要領に沿って設定される目標(中学校卒業段階:英検3級程度以上、高等学校卒業段階:英検準2級程度から2級程度以上)を達成した中・高生の割合50%)から、高等学校段階の生徒の特性・進路等に応じた英語力、例えば、高等学校卒業段階で、英検2から準1級、TOEFL iBT60点程度等以上を設定し、生徒の英語力の把握・分析・改善を行うことが必要。



調査事業の概要

実施内容

1. 英語力調査問題(4技能)

- ・「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」は合わせて2単位時間(50分×2)以内
- ・「話すこと」は上記3技能とは別に実施し、1受験者辺り10分程度(各学校1クラス)
- ・**出題の難易度はCEFRのA2～B2までの測定**が可能な形で出題
- ・**CEFRとの関連付け**を行う

2. 質問紙(生徒用・教員用・学校用)

生徒の学習状況や教員の指導の状況、学校の体制整備の状況を測定。

結果の活用について

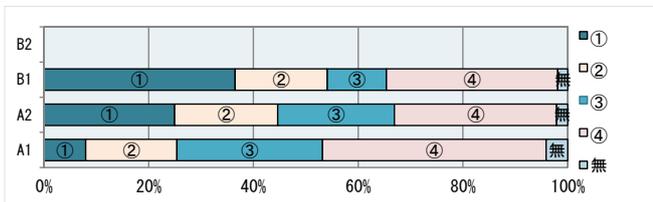
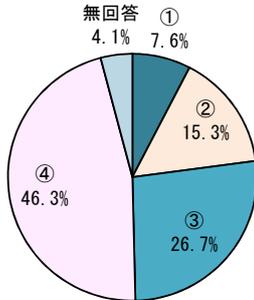
- 外部検定試験を活用して生徒の英語力と学習状況を把握・分析・検証することを通じ、**課題を把握**
- **教員が指導を行うに当たって生かすべきポイントを示し、教員の英語指導力とともに、生徒の英語力を向上**
- 26年度(旧教育課程で学んだ高3生)と27年度(新教育課程で学んだ高3生)を比較分析
(分析例)・英語力調査問題と質問紙を分析し、生徒の英語力と学習状況の関連を示す
・授業や指導体制の現状を把握し、教員が指導を行うに当たっての改善に生かす

4技能を通じた言語活動に対する意識

- 英語でスピーチやプレゼンテーションをした経験が少ない。
- 「話すこと」の試験結果が高いほど、授業において「英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思う」生徒の比率が高い（公立）

問 第2学年での英語の授業では、英語でスピーチやプレゼンテーションをしていたと思いますか。

- ①そう思う ②どちらかといえば、そう思う
③どちらかといえば、そう思わない ④そう思わない

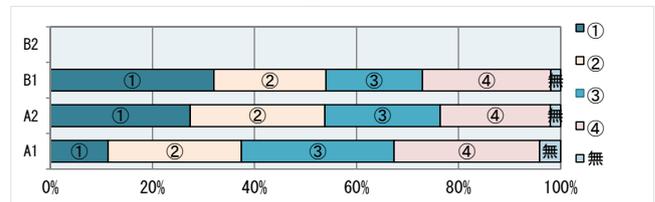
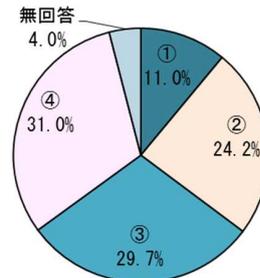


※「書くこと」の試験結果とのクロス。

- 聞いたり読んだりしたことについて、英語で話し合ったり意見交換をした経験が少ない。
- 「話すこと」の試験結果が高いほど、「生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしていると思う」生徒の比率が高い（公立）

問 第2学年での英語の授業では、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で話し合ったり意見の交換をしたりしていたと思いますか。

- ①そう思う ②どちらかといえば、そう思う
③どちらかといえば、そう思わない ④そう思わない



※「話すこと」の試験結果とのクロス。

（参考）外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ共通参照枠について

- CEFR（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment）は、語学シラバスやカリキュラムの手引きの作成、学習指導教材の編集、外国語運用能力の評価のために、透明性が高く、分かりやすい、包括的な基盤を提供するものとして、20年以上にわたる研究を経て策定された。欧州域内外で使われている。
- 欧州域内では、国により、CEFRの「共通参照レベル」が、初等教育、中等教育を通じた目標として適用されたり、欧州域内の言語能力に関する調査を実施するにあたって用いられるなどしている。

熟練した言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。
自立した言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいいてい事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

（出典）ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構

各試験団体のデータによるCEFRとの対照表

CEFR	Cambridge English	英検	GTEC CBT	IELTS	TEAP	TOEFL iBT	TOEFL Junior Comprehensive	TOEIC / TOEIC S&W
C2	CPE (200+)			8.5-9.0				
C1	CAE (180-199)	1級 (2810-3400)	1400	7.0-8.0	400	95-120		1305-1390 L&R 945~ S&W 360~
B2	FCE (160-179)	準1級 (2596-3200)	1250-1399	5.5-6.5	334-399	72-94	341-352	1095-1300 L&R 785~ S&W 310~
B1	PET (140-159)	2級 (1780-2250)	1000-1249	4.0-5.0	226-333	42-71	322-340	790-1090 L&R 550~ S&W 240~
A2	KET (120-139)	準2級 (1635-2100)	700-999	3.0	186-225		300-321	385-785 L&R 225~ S&W 160~
A1		3級-5級 (790-1875)	-699	2.0				200-380 L&R 120~ S&W 80~

英検：日本英語検定協会 <http://www.eiken.or.jp/forteachers/data/cefr/>
http://www.eiken.or.jp/association/info/2014/pdf/0901/20140901_pressrelease_01.pdf

TOEFL：米国ETS Webサイトに近日公開予定

IELTS：ブリティッシュ・カウンシル（および日本英語検定協会）資料より

TEAP：第1回 英語力の評価及び入試における外部試験活用に関する検討会 吉田研作教授資料より

Cambridge English（ケンブリッジ英検）：ケンブリッジ大学英語検定機構 <http://www.cambridgeenglish.org/exams-and-qualifications/cefr/cefr-exams/>
<http://www.cambridgeenglish.org/exams/cambridge-english-scale/>

※各試験団体の公表資料より文部科学省において作成

GTEC：ベネッセコーポレーションによる資料より

TOEIC：IIBC <http://www.toeic.or.jp/toeic/about/result.html>
「L&R」または「S&W」の記載が無い数値が4技能の合計点

受験料の負担について

〈現状〉

- 受験料は約2万円～約1万円弱～7000円。
- 各資格・検定試験団体は、大学・高校等や教育委員会など組織との契約によって、それぞれ可能な範囲で独自の減額、補助制度等を実施。

※コストは、主に①会場費、試験監督費、②テスト実施に必要な資材費、③スコアレポート発送費で構成。特に割合が大きいものは①。

・試験団体からは、学校側で試験会場（P Cルーム等の学校施設）及び試験官（教職員）の提供があればコスト削減の可能性ありとのご意見。

〈作業部会における論点〉

- 受験料の経済的負担に対する懸念の多数意見が予想されるため、それらに対する配慮が必要ではないか。
- 英語の資格・検定試験の活用促進の効果とともに、受験料負担の影響などについて把握・分析が必要ではないか。
- 経済的負担軽減の観点からは、新テストで英語4技能測定を行うことを前提とした方策も検討すべきではないか。

主な英語の資格・検定試験の概要

試験名	実施団体	受験人数	年間実施回数	成績表示方法	出題形式: 実施方式 (*1)	受験料
Cambridge English (ケンブリッジ英検)	ケンブリッジ大学 英語検定機構	国内人数非公開 ※全世界では約250万人	2-3回	上初級～特上級(5つ) 合否、スコア(80-230)、グレード	L, R, W: 紙 S: ペア面接	PET(B1) 11,880円～ (*5) KET(A2) 9,720円～
実用英語技能検定	日本英語検定協会	約235.5万人 (H25実績)	3回	1級～5級 合否による表示 H27よりスコア併記予定	L, R: 紙/CBT (W): 紙 (S): 面接/CBT (*2)	2級: 5,000円 準2級: 4,500円
GTEC CBT	ベネッセコーポレーション Berlitz Corporation ELS Educational Services ※一般財団法人進学基準研究機構(CCES)と共催	非公表	3回 (H27)	0-1400点	L, S, R, W: CBT	9,720円
GTEC for STUDENTS	ベネッセコーポレーション Berlitz Corporation ELS Educational Services	約73万人 (H26実績)	2回	0-810点	L, R, W: 紙 (S): タブレット(*3)	3,080円 L, R, W (5,040円 L, R, W, S)
IELTS	ブリティッシュ・カウンシル、 ケンブリッジ大学英語検定機構 日本英語検定協会 等 ※全世界では240万人	約3万人 (H26実績)	約35回	1.0-9.0 (0.5刻み)	L, R, W: 紙 S: 面接	25,380円
TEAP	日本英語検定協会	約1万人 (H26実績)	3回	80-400点	L, R, W: 紙 S: 面接 (*4)	15,000円
TOEFL iBT	テスト作成: ETS 日本事務局: CIEE	非公表	40-45回	0-120点 (4技能を各0-30点で評価)	L, S, R, W: CBT	230USドル
TOEFL Junior Comprehensive	テスト作成: ETS 日本事務局: GC&T	非公表	2-3回	0-352点	L, S, R, W: CBT	9,500円
TOEIC	テスト作成: ETS 日本事務局: IIBC ※TOEICプログラム全世界700万人	約236.1万人 (H25実績)	10回	10-990点 (L, R各5-495点)	L, R: 紙	5,725円
TOEIC S&W	テスト作成: ETS 日本事務局: IIBC ※TOEICプログラム全世界700万人	約1.5万人 (H25実績)	24回	0-400点 (S, W各0-200点)	S, W: CBT	10,260円

*1: L=Listening, S=Speaking, R=Reading, W=Writing *2: Wは1級・準1級、Sは3級以上 *3: Sはオプション *4: L/R, L/R/Wでも受験可能
*5: 実施試験センターにより異なることあり

受験会場・実施回数など受験機会

〈現状〉

- 地域によって受験会場×実施回数の差は大きい。

※地域間において、どの程度受験機会の差があるのか、試験団体から①各県別の年間の実施会場数・試験回数のデータをいただき、別紙のとおり、受験者数/全学生数・生徒数を比較。

〈作業部会における論点〉

- 公平性の観点から、学生生徒数に対する受験機会を確保するための方策の検討が必要ではないか。
- 学校等と試験団体との具体的な連携方策はどのように行うか。

※各試験団体では、会場数、実施回数ともに充実する方向

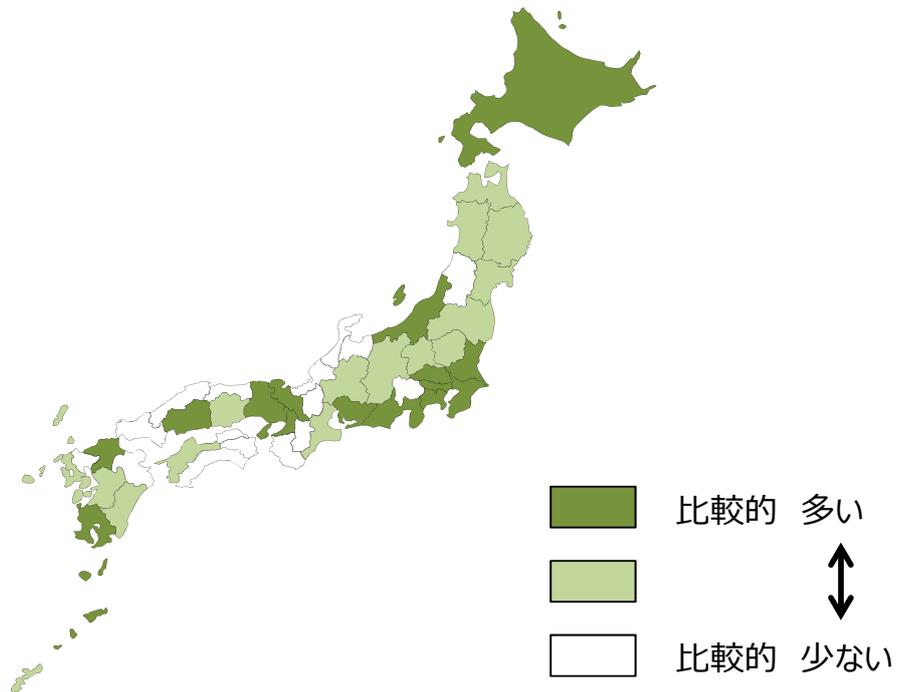
※学校等に対し会場・試験監督等の提供を要請するなど相互協力の仕組みはどのように行うか。

※会場回数を増やし、試験団体のコストを下げるための協働プロジェクトを検討してはどうか。 等

英語資格・検定試験の受験機会の地域間の違いについて

資格・検定試験の延べ回数（会場数×実施回数）

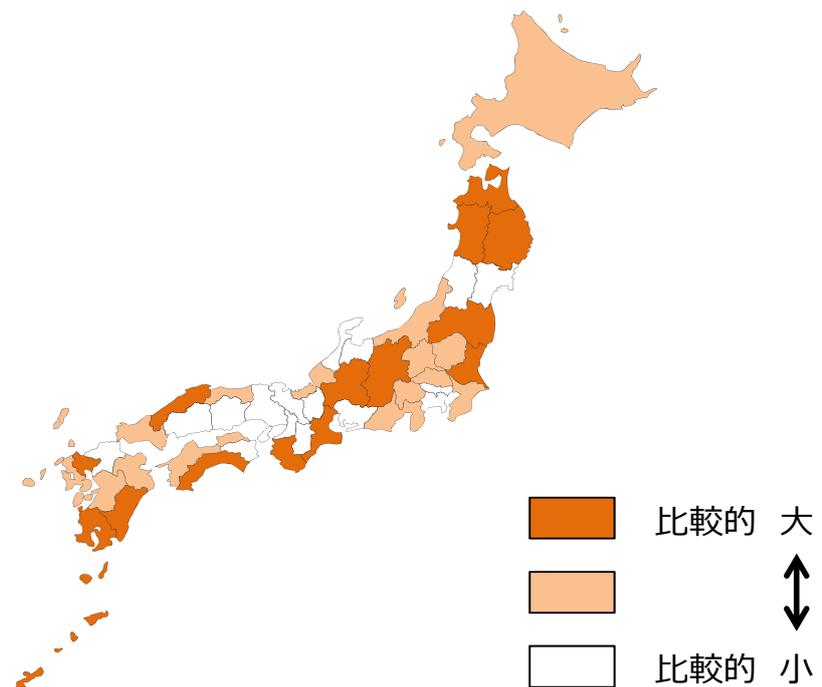
都道府県	延べ回数
東京都	5,797
埼玉県	3,625
神奈川県	2,955
⋮	
山形県	288
富山県	252
鳥取県	226



英語資格・検定試験の受験機会の地域間の違いについて

<大学> 全学生数に対する延べ回数の比率（延べ回数/全学生数）

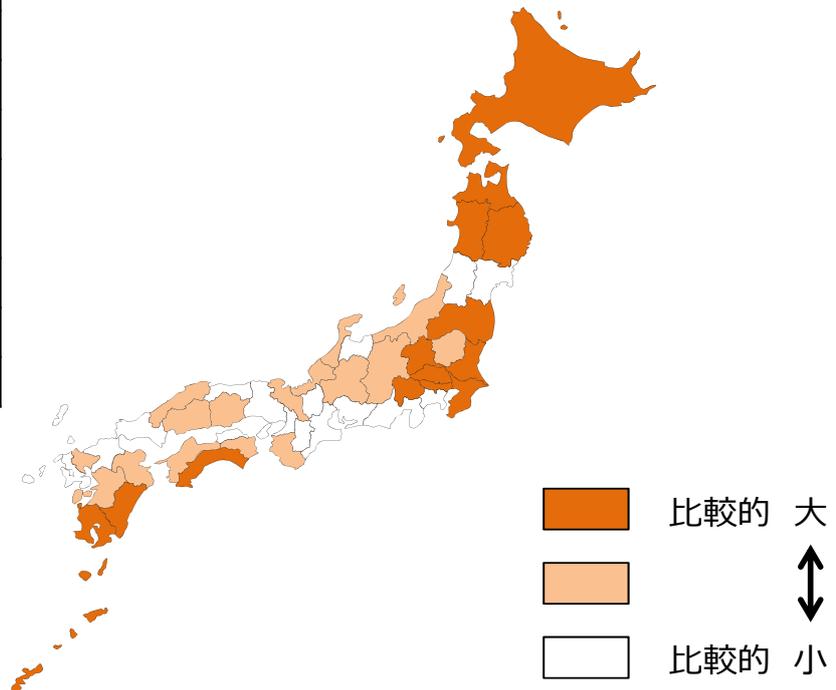
都道府県	延べ回数の比率
秋田県	0.0567
福島県	0.0538
鹿児島県	0.0499
⋮	
大阪府	0.0097
東京都	0.0076
京都府	0.0069



英語資格・検定試験の受験機会の地域間の違いについて

〈高等学校〉 全生徒数に対する延べ回数の比率（延べ回数/全生徒数）

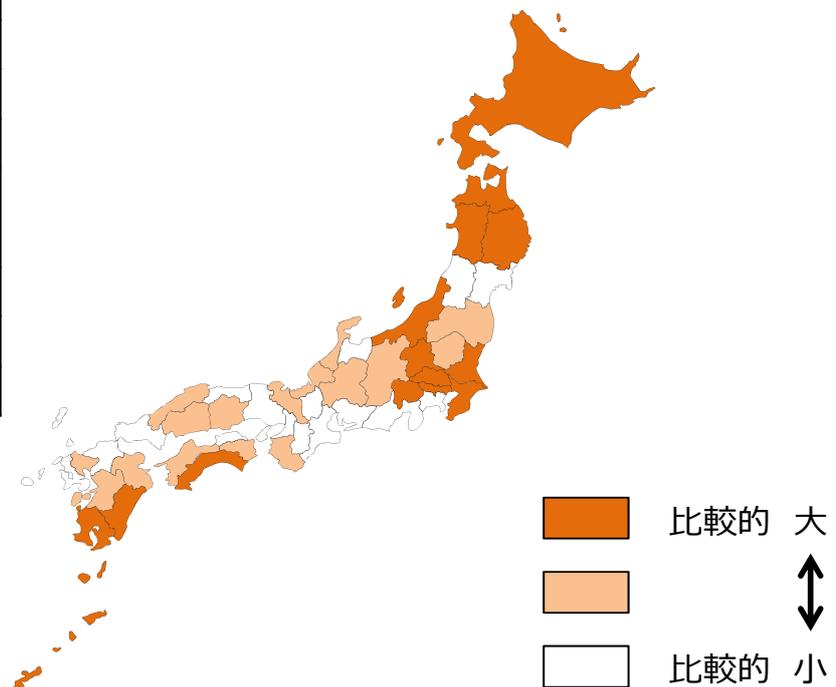
都道府県	延べ回数の比率
秋田県	0.0245
鹿児島県	0.0219
岩手県	0.0207
⋮	
大阪府	0.0098
山形県	0.0090
富山県	0.0087



英語資格・検定試験の受験機会の地域間の違いについて

〈中学校〉 全生徒数に対する延べ回数の比率（延べ回数/全生徒数）

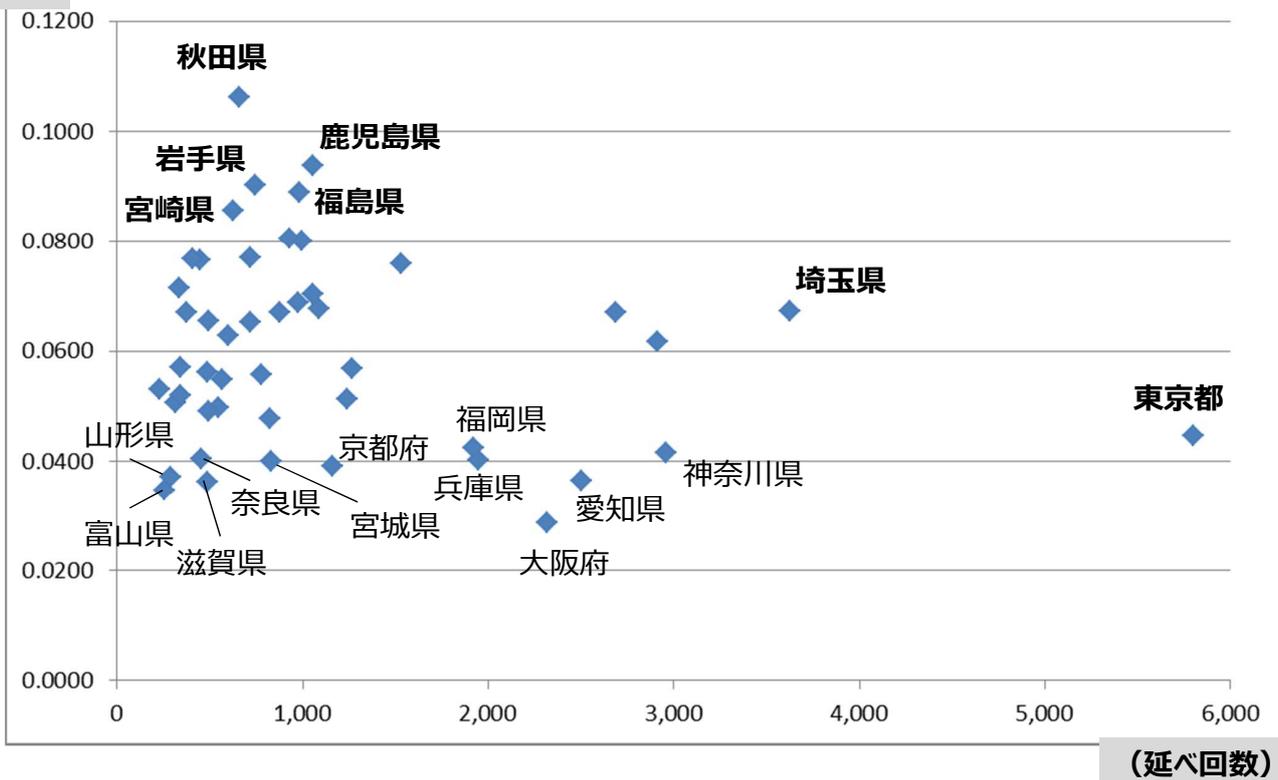
都道府県	延べ回数の比率
秋田県	0.0250
鹿児島県	0.0219
岩手県	0.0205
⋮	
大阪府	0.0093
山形県	0.0090
富山県	0.0083



(参考) 英語資格・検定試験の受験機会の地域間の違いについて

「延べ回数」および「全学生/生徒数に対する延べ回数の比率」の全国比較

比率



各試験の得点換算等の在り方について（検証等の方向性）①

〈現状〉

- 各資格・検定試験団体等において、CEFRとの関係性を調査研究し公表。
- 各資格・検定試験団体等のデータ提供を基に、対照表を作成・情報提供。

〈作業部会における論点〉

- 目的・出題意図等が異なる複数の試験間において、精度の高い換算表（※）を作成する検証は「公正性」の観点から相当なデータ等の裏付け、時間が必要ではないか。
- 検証に当たってどのような母集団、標本抽出を行うかなど必要な時間・費用・作業体制等の面も考慮した検証の在り方について、十分な議論を重ねた上で検討することが必要ではないか。

（検証方法：例）

- ・ 同一被験者の複数試験の受験による分析
- ・ 被験者に対するアンケートによる分析
- ・ CEFRなどとの関係性を明確化する分析 等

※：精度の高い換算表を作成するイメージとして、同一被験者の複数の受験結果を、線形等価（ $Y = ax + b$ ）やパーセンタイル法等の手法で行うには相当のデータ等を基に試験間の平均、分散等を調整・分析する必要があると想定。その他、CEFRの基準を参照したレベル設定の手法も複数あり。

各試験の得点換算等の在り方について（検証等の方向性）②

〈作業部会における論点〉（続き）

- 英語力評価、入学者選抜、生涯にわたる英語学習における活用を促進する観点から、4技能を測定する試験間で、より有効性の高い換算（※）や対照表の検証等を行い、生徒学生、学校、社会人が資格・検定試験の結果を適切かつ効果的に活用する仕組みを検討することが必要ではないか。
- 各資格・検定試験の妥当性・信頼性の観点から、団体等が既に実施しているCEFRなどとの関係性に関する検証状況（背景、方法、プロセス、結果等）について、各試験団体の目的等を明らかにしつつ、各団体等の協力を得て積極的に情報提供を行ってはどうか。
- 各学校、生徒学生がそれぞれの試験を選択する際の参照情報となる対照表の裏付けとなる補足的な調査研究を実施してはどうか。

【活用促進のための調査研究：例】

- ※1 27年度は、現在各団体から情報提供されているCEFRとの対照表を補強するための調査研究を実施してはどうか。例えば、複数試験の受験者のアンケート等（実施するかどうか、調査研究のイメージなどは、議論の上、検討）
- ※2 大学等における活用事例（各大学等における個別入学者選抜における活用方法など（みなし満点、加点方式、推薦等の活用における条件や基準の設定、活用の効果・課題等）を調査し、積極的に情報発信してはどうか
- ※3 CEFRとのマッピングが変更される場合、変更する予定の内容、理由、背景となる資料を試験団体から当協議会メンバーに開示してもらい、議論するルールを構築してはどうか。

主な英語の資格・検定試験の出題意図・語彙数 等

試験名	目的・出題意図	語彙数	国際通用性 ①実施国数 ②主な活用地域 ③海外団体との連携
Cambridge English (PET:CEFR B1)	英語圏における日常生活に必要なとされる実践的な英語力があるかを評価する	3,000語程度 (*1)	①約130カ国 ②英国、欧州、オーストラリア、ニュージーランド ③CaMLA(米国ミシガン大学)、OET(豪州)等
実用英語技能検定 (2級: CEFR B1)	英語圏における社会生活(日常・アカデミック・ビジネス)に必要な英語を理解し、使うことができるかを評価する	4,000語程度 (*2)	①約50カ国 ②アメリカ、オーストラリア、カナダ等 ③アジア6地域7団体およびCRELLA(英国)
GTEC CBT	英語を使用する大学で機能できる(アカデミックな)英語コミュニケーション力を測る	3,000～6,000語程度 (CEFR C1まで)	②北米(ELS Educational Services)
GTEC for STUDENTS	英語によるジェネラルな状況におけるコミュニケーション能力を測る	3,000語以下 ※タイプによって異なる (CEFRB2まで)	
IELTS	英語を用いたコミュニケーションが必要な場所において、就学・就業するために必要な英語力があるかを評価する	5,000～6,000語程度(*2)	①約140ヶ国以上 ②EU諸国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、アメリカ等
TEAP	EFL環境の大学で行われる授業等で行う言語活動において英語を理解したり、考えを伝えたりすることができるかを評価する	2,000～5,000語程度 (タスクにより異なる) (*2)	③CRELLA(英国)
TOEFL iBT	高等教育機関において英語を用いて学業を修めるのに必要な英語力を有しているかを測ることを目的とする。	(R) 3,000語で90.45%をカバー 5,000語で95.37%をカバー (L) 3,000語で96.22%をカバー(*3)	①約130カ国以上 ②英語圏(北米、オーストラリア、ニュージーランド等)、非英語圏(ドイツ、オランダ、トルコ、韓国等)
TOEFL Junior Comprehensive	英語を母国語としない中高生の英語運用能力を世界標準で評価する。	3,000語程度 98%の単語がセンター試験に出現(*4)	①8か国(実施国数拡大中、2技能については既に50か国以上)
TOEIC / TOEIC S&W	和文・英文和訳などの技術ではなく、身近な内容からビジネスまで幅広くどれだけ英語でコミュニケーションができるかということの評価する。	4,000語以上 (*5)	①約150カ国

*1: English Vocabulary Profile Wordsに基づいてカウントした概算 *2: BNC(British National Corpus) *3: BNC/COCA word-family lists <第1回連絡協議会資料より> *4: 2006年以降のセンター試験。グローバル・コミュニケーション&テストニング独自調査(2014年)
*5: 外部リサーチャーが独自に行った調査結果「英検2級より多いがテレビ、ニュース番組よりは少ない」からの推計値

主な英語の資格・検定試験の C E F R との関係性検証方法

試験名	C E F R 検証方法	補足事項
Cambridge English (ケンブリッジ英検)	・CEFRと共に開発（部分的にはあるが、CEFRはCambridge Englishをベースに設計された経緯あり）	・2015年より、Cambridge Englishスケール(スコア化)を導入
実用英語技能検定	・英検Can-doリストとCEFRとの比較 ・専門家によって構成されるパネルを中心として、①Basket法(*1) ②Modified Angoff法(*2)を使用して検証 ・EALTA(欧州言語テスト・評価学会)エキスパート研究者との共同研究 ・他試験結果(TOEFL PBT,iBT等)との比較	・スコア化(英検CSEスコア)導入 (CEFRとの対応付け、およびIRTを用いた各級の関係性よりスコア化)
GTEC CBT	・実際のGTEC CBT受験者によるCEFRレベル別Can-doアンケート結果により検証 ※科学研究費補助金 基盤研究(A)における「CEFR-J研究開発チーム」の「CEFR-J」デスクリプトを用いて関連づけ調査を実施	
GTEC for STUDENTS	・GTEC for STUDENTSとGTEC CBTのスコアの関連性を前提とし、上記研究内容と結び付けることにより検証。	
IELTS	・有識者によるベンチマーキング ・テスト結果使用者等による関係者からのフィードバックをもとに検証	
TEAP	・Can-do アンケートによるCEFRとの比較 ・独立研究機関(CRELLA)との共同研究 ・他試験結果(TOEFL ITP,iBT等)との比較	
TOEFL iBT	・Modified Angoff 法(*2)を使用 ・5,000名以上のテスト受験者データを使用 ・大学や英語教師からのCEFRレベルとTOEFLスコアレベルに関するフィードバックも活用	
TOEFL Junior Comprehensive	・Modified Angoff 法(*2)を使用 ・15か国18名の有識者による検討、2技能テストのスタディとの検証も実施	
TOEIC / TOEIC S&W	・Modified Angoff 法(*2)を使用 ・22名の有識者による検討、100,000名以上のテスト受験者データを使用 ・大学や英語教師からのCEFRレベルとTOEICスコアレベルに関するフィードバックも活用	

*1: Basket法 「(問題に対して)CEFRのどのレベルにある受験者であればこの問題に正解できますか?」という分析手法

*2: Modified Angoff法 「(問題に対して)CEFRの各レベルに相当する受験者が100人いるとして、何名がこの問題に正解できるか?」という分析手法

英語 4 技能資格・検定試験の活用事例

◇生徒・学生の英語力向上における活用例

<高校の例>

> ○○高等学校
コミュニケーション活動を重視した授業において、英検の過去問題を活用。生徒の意欲を引き出す。受験前には、英語科教員とALTで面接指導も実施。

> ○○高等学校
スピーチコンテストや短期留学等の取組を進める中で、英語力向上の目標として資格・検定試験を活用

<大学の例>

> スーパーグローバル大学等事業 採択大学
入学時から卒業時における目標を設定し、定期的 TOEFL 等の試験を受け、卒業時には、実践的なコミュニケーションが可能なグローバル人材を育成

> ○○大学
大学で学習する際に必要とされる英語運用能力を正確に測定するテストを導入し、基準点を設け、入学者選抜の際にすると共に、入学後の習熟度別クラス編成にも活用することで、英語力向上のためのきめ細かな指導を実施

◇入試における換算方法等(例：出願要件、みなし満点、点数加算等)の例

<いわゆる「みなし満点」>

> ○○大学 (一般入試)
TOEFL iBT71点以上
TOEFL PBT530点以上
英検準1級
IELTS 4技能6.5以上のスコアまたは等級を所持している者については、大学入試センター試験の英語科目を満点とし換算して、合否判定を行う

<出願要件の一部、英語試験免除>

> ○○大学
【自己推薦入試等：免除】
TOEFL68点以上(経済、商学関係)
【英語運用能力特別試験：出願要件】
TOEFL68点以上
(法学・政治学、国際関係)

> ○○大学 (一般入試)
英検2級以上：英語学力試験を免除

<点数加算の例>

> ○○大学	> ○○大学
TOEFL 48点以上 5点	英検2級以上 10点
61点以上 10点	英検準2級 8点
79点以上 25点	英検3級 6点
100点以上 50点	

> ○○高等学校
推薦入試において英検3級以上で加点

<高校入試の例>

> 大阪府における取組
入学者選抜においてTOEFL iBT、IELTS、英検のスコア等を一定の得点に換算し、学力検査の英語の得点と比較して高い方の得点を学力検査の得点とする(平成29年度より開始)

高大接続改革に関する 参考資料

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた 高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について ～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～のポイント(英語関係:抜粋)

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)(抜粋)

本答申は、教育改革における最大の課題でありながら実現が困難であった「高大接続」改革を、初めて現実のものにするための方策として、高等学校教育、大学教育及びそれらを接続する大学入学者選抜の抜本的な改革を提言するものである。

(2) グローバル化に対応したコミュニケーション力の育成・評価

- グローバル化の進展の中で、言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくため、国際共通語である英語の能力の向上と、我が国の伝統文化に関する深い理解、異文化への理解や躊躇せず交流する態度などが必要である。
- なかでも、真に使える英語を身に付けるため、単に受け身で「読む」「聞く」ができるというだけではなく、積極的に英語の技能を活用し、主体的に考え表現することができるよう、「書く」「話す」も含めた**四技能を総合的に育成・評価**することが重要である。
「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」においては、**四技能を総合的に評価できる問題の出題(例えば記述式問題など)や民間の資格・検定試験の活用**を行う。また、高等学校における英語教育の目標についても、**小学校から高等学校までを通じ達成を目指すべき教育目標を、「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、四技能に係る一貫した指標の形で設定**するよう、学習指導要領を改訂する。

(3) 学習指導要領の改訂も含めた高等学校教育改革の実現

- 高等学校の学習指導要領は、多様な若者の夢や目標を支援できる高等学校教育の実現を目指し、①「何を教えるか」ではなく「**どのような力を身に付けるか**」の観点に立って、②**そうした力を確実に育むため、指導内容に加えて、学習方法や学習環境についても明確にしていく**観点から**抜本的に見直す**。
- 具体的には、高等学校の学習指導要領を通じて、どのような資質・能力を育成しようとしているのかをより明確化するとともに、例えば、以下のような見直しを行う。

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」の在り方

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について（答申）（抜粋）

- ◆大学入学希望者が、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握することを主たる目的とし、「確かな学力」のうち「知識・技能」を単独で評価するのではなく、「知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」（「思考力・判断力・表現力」）を中心に評価する。

（中略）

- ◆**特に英語については、四技能を総合的に評価できる問題の出題（例えば記述式問題など）や民間の資格・検定試験の活用により、「読む」「聞く」だけではなく「書く」「話す」も含めた英語の能力をバランスよく評価する。また、他の教科・科目や「合教科・科目型」「総合型」についても、英語についての検討状況も踏まえつつ、民間の資格・検定試験の開発・活用も見据えた検討を行う。**

- ◆選抜性の高低にかかわらず多くの大学で活用できるよう、広範囲の難易度とする。特に、選抜性の高い大学が入学選抜の評価の一部として十分活用できる水準の、高難度の出題を含むものとする。
- ◆生涯学習の観点から、大学で学ぶ力を確認したいものは、社会人等を含め誰でも受検可能とする。また、海外からの受検も可能とするよう、実施時期や方法について検討するものとする。
- ◆入学希望者の経済的負担や受検場所、障害者の受検方法を考慮するなど、受検しやすい環境を整備する。

※「英語教育の在り方に関する有識者会議」報告書（平成26年9月26日）も参照のこと。「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」独自の問題作成を行うべきか、民間の資格・検定試験に全面的にゆだねるべきかについては、四技能を踏まえた作問の質に加えて、日本人の英語力の現状を踏まえたテスト開発の在り方、各試験間の得点換算の在り方、受検料など経済格差の解消、受検機会など地域格差の解消等に関する具体的な検討が必要であり、今後、学校関係団体、試験団体、経済団体、大学入試センター等が参加して設置された「連絡協議会」において速やかに検証が行われるよう求める。

「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の在り方

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学選抜の一体的改革について（答申）（抜粋）

- ◆高校生が、自らの高等学校教育における基礎的な学習の達成度の把握及び自らの学力を客観的に提示することができるようにし、それらを通じて生徒の学習意欲の喚起、改善を図る。
- ◆上記以外にも、結果を高等学校での指導改善にも生かすことや、進学時や就職時に基礎学力の証明や把握の方法の一つとして、その結果を大学等が用いることも可能とする。ただし、進学時への活用は、調査書にその結果を記入するなど、あくまで高等学校段階における学習成果を把握するための参考資料の一部として用いることとする。
- ◆高校生の個人単位又は学校単位での希望参加型とするが、できるだけ多くの生徒が参加することを可能とするための方策を検討する。
- ◆**対象教科・科目については、実施当初は「国語総合」「数学Ⅰ」「世界史」「現代社会」「物理基礎」「コミュニケーション英語Ⅰ」などの高等学校の必修科目を想定して検討する（選択受検も可能）。英語等については、民間の資格・検定試験も積極的に活用する。**
- ◆出題内容については、高等学校で育成すべき「確かな学力」を踏まえ、「思考力・判断力・表現力」を評価する問題も含めるが、学力の基礎となる知識・技能の質と量を確保する観点から、特に「知識・技能」の確実な習得を重視する。また、高校進学率約98%に達する高校生の知識・技能が広範にわたっていることに鑑み、高難度の問題から低難度の問題まで広範囲の難易度とする。
- ◆解答方式については、多肢選択方式を原則としつつ、記述式の導入を目指す。
- ◆高校生の主体的な学習を促進する観点から、在学中に複数回（例えば年間2回程度）受検機会を提供し、高等学校2年及び3年での希望に応じた受検を可能とする。実施時期については、夏～秋を基本として、学校現場の意見を聴取しながら検討する。
- ◆各学校・生徒に対し、段階別表示による成績提供を行うとともに、各自の正答率等も併せて表示する。

大学入学者選抜改革の全体像（イメージ）

※「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、入学者選抜への活用を本来の目的とするものではなく、進学時への活用は、調査書にその結果を記入するなど、あくまで高校の学習成果を把握するための参考資料の一部として用いることに留意。

